

H. Toyokuni: Elementa Linguae Latinae Botanicae (3)

本誌の14号および15号で、「植物学ラテン語初歩」として読者諸氏の参考になればと思い、小文を書いた。一応2回で、その小文を完結させたが、後で読み返して見て不足部分が多く、何か補足をしなければと考えていた。また幾人かの方々からリプリントが欲しいというリクエストも戴いた。国際植物命名規約で、新分類群を発表する際には、ラテン語の記載文を伴わなければならないと決められていても、いざ、記載文を書くための参考書と言え、日本語で書かれたものは皆無で、頼りになる辞書すら無い。岩波の「生物学辞典」においても、「新組合せ」に、“combinatio novum”とラテン語がつけられていて、第3版迄版が重ねられても“combinatio nova”と文法的に正しい表現にはなっていないし、また広川の「最新植物学用語辞典」でも、「寒地荒原」のラテン語が第8版になっても“erigidideserta”のまま、“frigidideserta”と訂正されていない。そんな訳で、再度筆を取り、実際にラテン語で記載文を書く際の間違い易い点や、難しい言いまわしの仕方などについて、少しずつ書いてみることにした。何等かの参考になれば幸である。

16. ギリシア語系ラテン語名詞の転尾

名詞の転尾 (declinatio) で最も間違い易いのは、ギリシア語系ラテン語についてである。例えば、柱頭 (stigma), 気孔 (stoma), 体系 (systema) など、語尾が-a で終わっているのに、第1種転尾の女性名詞とややもすると考えられがちである。しかし実際には、これらは第3種転尾の中性名詞である。昔、三省堂から出版された「大日本植物誌」のラテン語表題は、1938年に第1巻のトウシンソウ科が出版された時 “Descriptio et Systema Nova omnium plantarum……” と systema が女性名詞扱いであった。これは7冊目の1941年出版のハナゴケ目 (1) の時に、やっと文法的に正しい “Systema Novum” に改められた。第3種転尾のギリシア語系ラテン語は、語尾が-ma で終わっている名詞は、先ず疑って見る必要がある。しかし、束毛とか長毛の意のラテン語 “coma” は第1種転尾の女性名詞である。ギリシア語系ラテン語で、さらに間違い易いのに、第2種転尾の中性名詞 phyton (植物) がある。この名詞

は複数主格で *phyta* となるため、これまた第1種転尾の女性名詞と混同され、名著のタイトルにも間違いが見られる。例えば “Enumeratio Spermatophytarum Japonicarum” は正しくは、“……………Spermatophytorum Japonicorum” でなければならぬし、“Enumeratio Pteridophytarum Japonicarum” も、同じ理由で、“……………Pteridophytorum Japonicorum” としなければ、ラテン語文法上完全な間違いである。筆者は、この日本で出版された書のラテン語タイトルを何とか正当化することができないかと、“phyton” あるいは “phyta” を女性名詞として扱うラテン文法はないかと心の中で考えつつ、ウプサラ大学の図書館や、パリの自然史博物館で、豊富なラテン語辞典類に当たって見たが残念ながらその努力は無駄に終わった。

以下、ギリシア語系ラテン語の転尾を御紹介する。

a) 第1種転尾

ラテン語本来の第1種転尾に近いが、格により全く異なる場合がある。例として *botanica* (*botanice* と綴る)「植物学」がある。この語は次のように転尾する。

botanica (botanice), f. 「植物学」の変化

	Sing. 格語尾	Pl. 格語尾
Nom.	botanic- ^a (e)	botanic-ae
Gen.	botanic-es	botanic-arum
Dat.	botanic-ae	botanic-is
Acc.	botanic-en	botanic-as
Abl.	botanic-e	botanic-is

したがって、植物学の教授は *professor botanices* であり、*professor botanicae* ではない。これと同様な転尾をする語としては、例えばツツジ科のツガザクラ属の学名 *Phyllodoce* がある。この語は、ギリシアの詩人 Vergilius の詩 “Aeneis” 中に出現する海のニンフの名 *Phyllodoce* に由来し、*botanica* と同じ転尾をする。

b) 第2種転尾

第2種転尾のギリシア語系ラテン語の転尾は、本誌14号69頁に紹介したように、主格語尾が -on で終わっている中性名詞であり、*phyton*, *organon*,

Phyllodoce, f. 「ツガザクラ属」の変化

	Sing. 格語尾	Pl. 格語尾
Nom.	Phyllodoc-e	Phyllodoc-ae
Gen.	Phyllodoc-es	Phyllodoc-arum
Dat.	Phyllodoc-ae	Phyllodoc-is
Acc.	Phyllodoc-en	Phyllodoc-as
Abl.	Phyllodoc-e	Phyllodoc-is

skeleton, plancton (プランクトン) およびその合成語等がこの変化をする。前頁に述べたように「種子植物」は "spermatophyton" (単数), "spermatophyta" (複数) であり, 「シダ植物」は "pteridophyton" (単数), "pteridophyta" (複数) となる。ここでは転尾の例として spermatophyton をあげておく。

spermatophyton, n. 「種子植物」の変化

	Sing. 格語尾	Pl. 格語尾
Nom.	spermatophyt-on	spermatophyt-a
Gen.	spermatophyt-i	spermatophyt-orum
Dat.	spermatophyt-o	spermatophyt-is
Acc.	spermatophyt-on	spermatophyt-a
Abl.	spermatophyt-o	spermatophyt-is

c) 第3種転尾

第3種転尾の名詞は、様々な転尾の形があって非常に複雑である。その中で、ギリシア語系ラテン語は、既に述べたように、先ず語尾が -ma で終る中性名詞をあげることができる。前頁で述べた stigma, stoma, systema の他に植物の記載上よく出てくる単語としては, lemma (外花類, 外稃, 護穎), parenchyma (柔組織), rhizoma (根茎), trichoma (毛) などがあり, lemma を女性名詞として扱っている記載文も時々見受けられるけれども, 文法的には正しくない。前報では, stigma の転尾を例として紹介したので, ここでは rhizoma の変化を載せる。

第3種転尾に属しながら, 前述の第2種転尾の場合と同じく, 語尾が -on で終る名詞にもギリシア

rhizoma, n. 「根茎」の変化

	Sing. 格語尾	Pl. 格語尾
Nom.	rhizoma	rhizoma-ta
Gen.	rhizoma-tis	rhizoma-tum
Dat.	rhizoma-ti	rhizoma-tibus
Acc.	rhizoma	rhizoma-ta
Abl.	rhizoma-te	rhizoma-tibus

語起源のものが多い。この転尾では, さらに単数属格で -onis と語尾になるものと, -ontis となるものがある。前者には, icon, f. (図) や siphon, m. (管) がある。次に icon の転尾を示す。

icon, f. 「図」の変化

	Sing. 格語尾	Pl. 格語尾
Nom.	icon	icon-es
Gen.	icon-is	icon-um
Dat.	icon-i	icon-ibus
Acc.	icon-em	icon-es
Abl.	icon-e	icon-ibus

属名としての, キキョウ属 Platycodon, ジャノヒゲ属 Ophiopogon, ヒルムシロ属 Potamogeton など, この icon と同じ変化をする。

次に, これは属名以外には, 植物学用語には殆ど出てこないが, 前述のように, 主格で -on, 属格単数で -ontis となるものがある。我々になじみの深い Erigeron ムカシヨモギ属や, 日本に自生はないが Leontodon タンポポモドキ属はこの転尾をする。

英語のように, 名詞に文法的な性 (genus) の無い言語を使用していると, ラテン語のような, 名詞の性によって, それに附加される形容詞の語尾も違ってしまう言語はいかにも難しく感じられるが, なれてしまえば, 文法的性と転尾によって, 単語がたくさん並んで文を作っている中で, 単語同志の関係がよく判ってきて理解し易いので, 語尾の形だけで, 自己流に名詞の性を判定せず, 未知の語は一々辞典によって性を確かめるべきである。

(続く)

〔植物ニュース〕 82. ニセシラゲガヤ (新称)

Holcus mollis L.

シラゲガヤ属はヨーロッパからアフリカにかけて10種ほどあるが, そのうちシラゲガヤは世界の温帯地域に帰化し, 県内でもよく見ることができる。

ところで, 昨(1984)年7月に茅野市効外の三井ノ森を調査した所, 竜神池とよぶ人工池のほとりでシラゲガヤに似た1種を採集し, 持ち帰って検定し

たところ H. mollis と同定することができた (清水 29870, SHIN)。これは, シラゲガヤと異り, 茎や葉に軟毛は少く, 上方小花の外花類の芒はまっすぐに小穂からぬき出ているので見分けは易しい。手元の文献に当り, 帰化植物の研究家の浅川富雄氏とも相談したが, 日本には帰化の記録はまだないようである。ニセシラゲガヤの和名を用意し, 長野県新産として記録しておく。 (清水 建美)